愛。そして殺人の快楽

いざよいキラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛。そして殺人の快楽

【Ｎコード】
Ｎ０６５８Ａ

【作者名】
いざよいキラー

【あらすじ】
『かごめかごめ』肉体は鳥かご、快楽がエサ。籠の中の鳥は、自分が不幸であることに気付かない。青空の広さを忘れ、自分が飛べることすら忘れた小鳥。思い出す方法は二つ。それは、愛。そして、殺人の快楽…。

推理ＬＶ．０～ジャブ～（前書き）

～かごめかごめ～肉体は鳥かご、快楽がエサ。籠の中の鳥は、自分が不幸であることに気付かない。青空の広さを忘れ、自分が飛べることすら忘れた小鳥。思い出す方法は二つ。それは、愛。そして殺人の快楽。新感覚の電波ミステリーを、貴方へ。

推理ＬＶ．０〜ジャブ〜

遠くに、セミの羽音が木霊している。

ガリガリ君をひとかじり…雫がポタリと、机に落ちた。

（拭かないと、蟻が行列を作ってしまいますね）

ふきんはカラカラだ…でも、
だからこそ、よく滴を吸い込む。

夏の日差しと、窓から吹き付ける乾いた風が、
アレを良いふきんにした。

最高に心地よい今の体勢を崩すに値する…最高のふきん。

そうだ。

僕は、怠け者なんかじゃない。

やるぞ。

意を決して半身を起こし。よいしょっっっと右手を伸ばす。
あと…５ｃｍ…４．７ｃｍ…３．４１ｃｍ…２．９８３ｃｍ…そして、
ふきんとの距離が、１．８５６８ｃｍを切った、
その時…

ブレスレットのエメラルドが？カツン？と鳴った。

「つっ、また君か…」

机の上でくすぶり続ける、蚊取り線香。

エメラルドが小突いた物は、
口から柔らかい煙を吐いて…遥か遠くを見つめる…陶器の豚。

アンティーク一色の部屋に、毒の煙を撒き散らして調和を揺るがす。
ただ一人、強烈に在る豚の王…これは、僕だ。

だから捨てられない。捨てるわけにはいかない。

「ハァ…」

なんだか興ざめだ。

どうやら今は、滴を拭く時ではないようだ。
僕は手を引っ込めて、再びドサッ、と安楽椅子に身を沈めた。

毒の煙が織り成す曲線美…しばし目にとどめん。

…ミーンミンミンミン…

（…美しい…）

…スイッチョ、スイッチョ、スイッスイッスイッ…

（…）

…さわさわさわ…チリーン…

（…全てが美しい…）

…キリキリキリキリ、キリ、キ…キ…

（…うっとり…）

窓から入るそよ風。
カーテンを揺らし、僕の頬をなで、最後に毒の煙を乗せて、
入口の方へとゆらゆら流れていく。

（…なんてエキサイティングな、壁のひび割れなのかしら…）

…ぶー――――――ん、ぶーん、ぶ、フンッ…

…蝿だ。

一匹の蝿が、蚊取り線香の煙に当たってクラリと舞い堕ち、
滴の隣でピクピクと、なまめかしく肢を蠢かし始めた。

（…この形…）

やがて痙攣は収まり？蝿？は？死骸？となる。

（また…始まるのかしら…？）

未来の布石はあらゆる場所で、必死に僕らを導こうとしている。
それに気付かないことが、どれほど罪深く…恐ろしいことか。

蝿が落ちることで、テーブル上に?符号?が顕われた。
僕は、そこに築かれた?世界?を観る…
まるで天蓋…落下の象…垂直と螺旋…ハエの死骸と、水色の雫。アクアマリン。

これは…

（逆位置にベルゼブル―浄化の美徳）
（そして、正位…ああ、いけないいけない）

また、悪い癖が始まった。

思考のスイッチをＯＦＦ…
落ち着かない両手を抑え付け、頬杖を突く…
顔筋を操作。気だるげな表情を作り…

ようやく僕は、こう考えることに成功した。

（ふぅん、蝿も蚊取り線香で死ぬのか…）

今は夏を楽しもう。

ガリガリ君と蚊取り線香…空が紫色に落ちて、セミの声が止めば、窓の外に花火が上がる。

「ガリガリ君は、ソーダ味が王道だよね…」

そうだ。（クス）
ゆっくりと、夏を楽しもうじゃないか。

天から降り注ぐ真っ白い光を受けて、
遠くの山がキラキラと輝いている。
まるで、夏の全てを凝縮したような…このひととき。
嫌いじゃない。

嗚呼…なんだか贅沢な気分だ。
耳を澄ます。

聞こえるのは、絶頂を極め、停滞を迎えた夏の昼下がりと、
もう一つ。

トン…トン…トン…階段を昇る、足音。

（誰かしら）

ミシ…ミシ…廊下を歩く、足音。

（足音で判別できるほど、仲の良い人間はおりませんわ）

コンコン

背後のドアがノックされた。出入口は一つ。

コンコン

音階に特徴なし…まだ訪問者は特定できない。
もう少し情報が必要だ。

「はにゃん？」

椅子に沈んだまま首を４５。傾げ、ドアを視界に捉える。
アンティーク調のドア。
人の手によって何度も磨かれた証となる、テラテラとした鈍い輝き。
一点の隙もない重厚な樫の木。
あまりにも重厚すぎて、開閉がしんどい…。
（ふふ、おいでなすったわね）
ドアを一瞥するだけで充分だった。
僕は訪問者が第一声を発する前に、その人物を特定した。
？越前康介？に間違いない。
「はにゃーん。コースケにゃーん」
「ああ、入っていいか？」
ノックして、許可を得てから入室する。
越前康介は平均以上の紳士だ。
けれど…ノックの仕方が、とても恥ずかしい。
いまどきアメリカのホームドラマでもやらないような…。
彼は、そんなノックをやらかしてしまった。
「へろへろ～」（ハローと東北弁の「入れ」を融合）

彼の流儀に沿って、メリケン風味の挨拶を投げかけてやる。
遠回し過ぎる嫌味だが、彼には通じるだろう。

いつも、嵐のようにやって来て、新しい世界を見せてくれる。
越前康介…エチゼンコウスケ…

そんな慇懃無礼な使者・越前の第二声。

「『はにゃーん』は、やめておきたまえ」
「今の君には、いささか不釣合いだ」

（あらあら…いつもながら手厳しいこと）
（少し、お仕置きが必要ね）

反論の言葉は４０８５通りほど、閃いた。
その中からたった一つを選ばねばならない。

残酷な瞬間だと思わないか？

４０８５通りの反論は、一つ残らず僕の本音。

けれど、その全てを叩きつけるには、
とてもとても、時間が足らないのだから。

『貴方たちは、何故そうやって眉間にシワを寄せて、そこに立つの？』
『人は、こんなにも愛に包まれ、輝いているのに』

こんな感じの意味だけど。

ある程度フィルターを通さないと会話が成立しないのは明白。
彼が次の言葉を発するまで、４．２秒。

僕は必死に考えた…。

―二章へ続く―

【推理レベル０】

Q.　僕は、なぜドアの方を見ただけで人物を特定できたのでしょう？

推理ＬＶ．０～ジャブ～（後書き）

なんか小説の肥やしになるようなアルバイト、ないもんですかね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0658a/

愛。そして殺人の快楽

2010年10月15日21時36分発行